黒狗の城：異聞

神田　慧

第1章

「変なことを言うようやけど、今からさせていただく噺は、他言無用でお願いします」

文禄3年（1594年）、大坂の天満宮にある一室で、大村由己（おおむら ゆうこ）はそうある客人に語りかけた。大村由己という、安土・桃山時代に活躍した著述家の男が、この物語の語り手である。

大村は、豊臣秀吉がまだ羽柴と言う姓を名乗っていた頃から、秀吉の御伽衆（おとぎしゅう）として長年仕えてきた。御伽衆というのは言わばお抱えの講釈師みたいなもので、特に秀吉はその生まれに由来して読み書きが不得手であったためか、御伽衆を他の武将たちよりも重宝した。秀吉の御伽衆だった人物としては大村の他に、上方落語の祖の曽呂利新左衛門（そろり しんざえもん）、織田信長の弟の織田有楽斎（おだ うらくさい）、室町幕府最後の将軍足利義昭などが有名だろう。

天正10年（1582年）、中国大返しの後に、秀吉から天満宮の別当（長官）のポストを与えられた大村は、それから天満宮を活動の拠点にしていた。秀吉が天下人となってからは、主に秀吉の活躍を描いた英雄譚としての伝記を書いたり、秀吉を讃える能の新作を拵えたりと、豊臣政権のスポークスマンとしての役割を主に担ってきた。年齢はもう60に近い。

「ほんで多分この噺をするんも、最初で最後になりますやろな」そう大村は続けた。

「それは興味深い噺ですな。そんなに危ない噺ですかな？」と客人が言う。客人は部屋の下座に座っていた。初老の、大黒天のように恰幅の良い男だった。

「私は秀吉様の伝記やら能やらを仰山書きましたけんど、なんと言うか、あのような御仁のお働きを讃える長い話を書くゆうんは、骨が折れるんですわ。草の者（忍びのこと）を使って殺したヤツの名前も、どこぞの家から連れ去って側室にした娘の名前も、ほんまの手の指の本数も書かれへん。いちいちそんなこと書いとったら、いくつ首があっても足らしまへんからな。ほんま、やってへん悪行を見つける方が難しいくらいの御仁やのに…私があの伝記に書いとるんは嘘ばっかりなんですわ。ほんでふと、誰かにほんまにあったことを一回だけでも喋ってみたいと思いましたんや」

客人の方はというと、バレただけで首が飛ぶような話であると言われても、動じる気配が一切なかった。

「それは、とんだ心境の変化だ」と客人は笑う。
「歳を取ってから、急に何かをふと思いつくいうことはようあるもんですわ。…まあ、そういうわけでございます。あなた様は私の知ってる方の中でも特に口が硬いもんやから…私も話す気になったんです。この噺が漏れたら、私はあっという間に打ち首やさかい。まあもう６０近いから、床で死のうが首斬られようがそないに変わらんのですが。でも私の書いた作品が大罪人の作やいうて伝わんのだけは勘弁やさかい、なにとぞ、この噺はご自分のお心に仕舞っていただきたいんです」
「それはそれは、もちろん、他言無用にいたしましょう」
「ありがとうございます。ほんだらそろそろ噺を始めるといたしましょう。秀吉様が死んでも忘れられへん…小牧・長久手の戦と並ぶ、もう一つの隠された、屈辱の戦の話でございます」
　そういって噺が始まった。
「私が生まれ育った三木、大村の里から、東へぐーっと山を越えていきますと、“道場城（どうじょうじょう）”という小さい山城がございます。武庫川の上流、有馬川と有野川いう二つの川が分岐したところにある城ですわ。そんでその城の歴史の中で、城は４回攻め落とされとるんですな。ほんで重要なんは、その４回目の落城のことです…」

第２章

　天正５年（１５７９年）６月２２日。
　道場城は築城されてより通算４度目の、落城の日を迎えた。やはりこのような小城の保つことができる平和な期間は、往々にして短いと相場が決まっている。
　道場城を攻め落としたのは、織田家家臣で後の天下人、羽柴筑前守秀吉の軍である。秀吉はその前年、織田信長より中国地方の雄、毛利家の勢力圏への侵攻を命じられていた。
　秀吉はまず、毛利の治める中国地方と織田の治める関西圏の間で両勢力の緩衝地帯となっていた播磨国の完全掌握に着手した。秀吉は毛利側についた播磨の豪族、別所長治（べっしょ ながはる）とそれに続く国人衆を根絶やしにしようと、別所長治の居城、三木城を大軍で包囲し、攻城戦を展開した。しかし三木城は、播磨一と謳われる難攻不落ぶりを見せ、一年経っても降伏する気配がなかった。
　さらに秀吉の援軍に向かうはずだった織田方の武将、荒木村重（あらき むらしげ）が摂津国で反乱を起こし、村重を説得しに有岡城へ向かった秀吉傘下の武将、黒田官兵衛は村重に捕えられて帰ってこず、秀吉の右腕とも呼べる軍師、竹中重治は病で死んだばかり。主君の織田信長は、未だ抵抗を続ける石山本願寺の勢力や村重を裏で支援する毛利家に激怒し、毛利を図に乗らせるなと秀吉に播磨平定を急かしてきていた。

こうした切迫した状況の中で、三木城攻めの一進一退の戦況を見かねた秀吉は作戦を変更し、大軍を二つに分けることにした。まず、弟の羽柴秀長を三木城の向かいの平井山の本陣に止め置き、三木城を引き続き攻め続けるよう命令する。そして自身は、周辺の毛利方の支城を次々と血祭りにあげて回ることにしたのだ。支城を落とすことで、本城たる三木城を孤立無援に追い込み、弱らせるためである。

別所長治に同調していた道場城も、秀吉自ら率いる軍の攻撃を受けた。戦は朝に始まり、城方は善戦したものの、夕方、秀吉はついに城を落とし、その本丸で次の城を攻める軍議を始めた。

「たった２００人ぽっちで向こうてくるとは思わなんだわ。あれが侍の意地ゆうやつか。よう戦ったもんだわ」

城の陣屋で羽柴秀吉は、傘下の諸将たちにそう話しかけた。

諸将というのは蜂須賀小六、前野長康、浅野長政、杉原家次らである。陣屋の隅には、三木城攻めの際に、現地で御伽衆として召し抱えられた大村由己もいた。大村は武将ではないので、部屋の隅で片膝をついて控えていた。大村は、秀吉の言葉を敵への賛辞だと受け取った諸将らが、秀吉の言葉に頷いているのを眺めていた。

城主の松原右近太夫（うこんたゆう）の首が届いた。

「来たか」と言って秀吉が席を立つ。そして首桶から首を取り出した。やけに白い首だ。諸将が、どんな顔をしているだろうと首をのぞこうとした時、秀吉はなんと首をぞんざいに投げ捨て、鞠のように蹴り始めた。首の桃色の断面から血が漏れ出す。

秀吉は「おい百姓侍！おみゃー、突っ込んでいって死ぬだけなんやったら、最初から逃げるか腹切るか素直に城を開けるかせえやこの、どクソたわけ！こんな塵みたいな城が、一丁前に抗いおって。半日を無駄にしたわ！」と何度も蹴りつける。

ついには首は庭の方へ飛んでいってしまった。秀吉は鼻を鳴らすと、「おいお前、アレ拾ってどっかに晒してまえ！」と首を届けた兵に命じて席に戻る。秀吉が諸将を見渡すと、皆慌てて一様に俯いた。沈黙である。秀吉が声を荒らげる。

「おみゃーらのクソ真面目な顔もつまらん！頭の働くヤツはみんなどっかへ行ってまって、残っとうヤツはこのザマだわ」

秀吉は不機嫌だ。

「よし、決めた。支城を片っ端から潰すのは辞めや。播磨平定のためには全部潰さなと思うてまったが、こないにチンケな、あってもなくても変わらんような城が多いとは思わんかった。こないな城、いくつ落としてもなんの得にもならん。こんなんで時間を食うとるで、毛利のクソッタレが三木城へ糧秣を送る道をまた、性懲りも無く作ってまって、いつまでも別所長治が降伏せんのや」

秀吉が居並ぶ諸将の一人、蜂須賀小六を呼ぶ。

「おい小六、三木城への糧秣の新しい補給路がどうなっとるか、目処はついたんか」
蜂須賀小六は緊張した面持ちで、地図を指し示しながら話した。
「は、高砂城（たかさごじょう）から加古川を船で上る補給路と、三木通秋（みき みちあき）が指揮をとっていた、明石魚住城（あかしうおずみじょう）からの補給路の二つはすでに両城を落として潰しましたが…もう一つ新たに、荒木村重の家臣が守る花隈城（はなくまじょう）から、ここの丹生山城（にぶやまじょう）と、淡河城（おうごじょう）を経由して、三木城へ運ぶ補給路ができたようです」
秀吉が舌打ちした。
「村重が噛んでるのか」
「殿、村重のことに関しては、大殿様（信長のこと）が、信忠さま（信長の嫡男）と明智殿に一任しておられますので…今は補給路の中継地点、丹生山と淡河を落としてしまうのが肝要かと」と杉原家次が進言する。
「分かっておる！最初からそのつもりだわ」と秀吉が家次に怒鳴った。そして「おい坊主！」と言った。
「は！」と大村が秀吉の元へ出る。秀吉は大村のことを“坊主”と呼んでいた。大村は元々、三木大村金剛寺という寺の僧だったからだ。
「なんでっしゃろ」
「おみゃーを召し抱えたんは、官兵衛の代わりに播磨に詳しいヤツが必要やったからでもある。
丹生山城と淡河城は誰が守っとる」
「はあ。丹生山いうのは…元々でかい寺やったんですわ。せやから多分、城と言うよりは、ちょっと砦寄りの寺院と言うのがしっくりきますな。せやから今丹生山を守っとんのは、元々おった城の軍とかやなくて…近くの毛利方の城から護衛で集められたヤツらのはず。多くて３００人くらいでっしゃろ」
「よし。淡河城は」
「淡河城を守っとるのは淡河定範（おうご さだのり）いう、戦上手の老将ですわ。確か別所長治の、義理の叔父にあたる人やったと聞いたことがありますな」
「ほう。兵の数は」
「この城よりは断然多いやろうけど、流石に１０００はおりませんやろな。騎馬と足軽足しても、多くて８００というところでしょうな」
「よし！ええやろう」秀吉は諸将たちに向き直る。
「おみゃーら、次は丹生山城と淡河城を落とす。明日には発つ。それまでにこの城と下の町と村にあるもんは全部奪っとけ。軍議終わり！」
翌日の昼、城や城下町に残っていたすべての物資を略奪し尽くした羽柴軍は道場城を

発った。

第３章

丹生山城は、石垣などを用いず、土台部分なども全て土を盛って築いた近年稀に見るタイプの城だった。確かに、元々寺院であっただけあって他の城とは少し違うようだ。

羽柴軍が丹生山城の攻略作戦を開始したのは６月２４日の朝である。羽柴軍の軍容は、あくまで別働隊ではあるものの、騎馬１４００騎、足軽兵７０００人の総勢８４００人。

対する丹生山城は、大村が推測した通りの正規の守備軍３００人…に、さらに周辺の野武士や有志の農民兵ら約２００人を抱え込み、総勢５００人となっていた。

丹生山城攻略戦に関して特筆すべきことは、その攻略の策である。

１日目が終わったのち、秀吉は周辺の農民が丹生山城に加勢している事を知ると、配下に命じて丹生山城の周辺の村や集落を捜索させ、残っていた農民たちの中から、城に加勢した村の男たちの親族に当たる者を全て生け取りにした。

翌日、秀吉は城をほどほどの戦力で攻めさせ、頃合いを見て退却させた。戦いのどさくさに紛れて密偵を城内に送り込んだのである。城方の兵とともに城内へ引き上げた密偵は、あらかじめ決められていた農民兵の何人かに一人ずつ接触し、それぞれの親族の持っていた品を見せて脅しをかける。

「夜間に城内で火を放て。明日の夜が明けても火の手が上がらなければ…お前の親族を拷問にかけた後に城の前で磔にして見せしめにしてやる」と。

翌日の深夜午前３時、羽柴軍の兵たちは、交代で夜間も鬨の声をあげ続け、城方を威圧していた。

その時、丹生山城の複数の曲輪（くるわ）や陣屋から同時に火の手があがった。鬨の声をあげる羽柴軍の兵を盛り上げる陣太鼓のリズムが変わり、法螺貝や陣鐘（じんがね）の音も混ざり始める。夜襲をかける合図である。

兵たちは一斉に松明を持って麓の城の門に殺到、これを打ち破った。山を駆け上り、城内になだれ込む。２時間後、丹生山の全土が炎で包まれた。

本陣の秀吉は漆の椀に酒を手酌で注ぎながら、その光景を眺めていた。赤やオレンジの炎が山の表面を蠢き、麓では自軍の兵たちが影絵のようにチョロチョロと動き回っていた。

「えらい季節外れの紅葉や。こりゃ、酒を飲むのにちょうどええ灯りだわ」

秀吉はそう言ってニヤと口角を吊り上げた。その瞳に燃える丹生山がゆらゆらと踊っていた。

浅野長政麾下の士卒、真島佐兵衛（ましま さへえ）が、城方の指揮をとっていた将、

高橋正純（たかはしまさずみ）を討ち取った。
高橋正純は播磨国印南郡（いんなみぐん）の志方城（しがたじょう）より派遣された将で、城の北口の門から敗走を試みていたところだった。
丹生山城は指揮官を失い、城の兵２８３人を殺され、２４６人が焼け死んだ。
丹生山城は落城を迎えた。

第４章

丹生山城と淡河城の距離は、直線距離にして約３６００メートルと非常に近いが、実際道の整備など一切されていないこの時代、険しく入り組んだ山道を馬や荷車を連れた数千人規模の軍が進むのは、数字だけを見て推し量ったよりもずっと時間がかかる。
羽柴軍が淡河城のある丘陵の向かい側に布陣が完了したのは、丹生山城落城から１日経った、６月２７日、昼のことだった。
淡河城の向かい側の丘陵の、盆地を挟んで南側の尾根の上に、秀吉の本陣はあった。急造した粗末な陣屋である。軍議で使うための矢楯（やだて）で組んだ机があり、壁には粗末な作りを隠すように、桐紋が染め抜かれた陣幕がかかっていた。
全軍の布陣が完了したとの伝令を伝える兵がその本陣にやってきた時、甲冑に着替えた秀吉は床几（しょうぎ）に腰掛け、遅い朝飯を食べている最中だった。秀吉の後ろには朝飯は、麦飯と瓜の味噌漬けという簡素なものだった。すぐ近くの集落から徴発してきたものだ。無論、庶民の食べるものだが、秀吉は百姓上がりとあってこういったものが懐かしいらしく、「これは旨い漬物だわ」と夢中になって食べていた。伝令兵の報告は全く聞いていなかった。
秀吉は朝飯を食べ終わった後、「旨かった。後でこの味噌漬けを作ったヤツに褒美をくれたるだろう」と言って、側に控える大村由己に話しかけた。
「坊主、お前も瓜の味噌漬け食うか？」
「いや、瓜はどうも苦手なんですわ」
「ふん、贅沢な坊主だわ」
「それより秀吉様、さっき伝令の兵が来よりましたけど、気づいてはりました？」
気づいていなかった秀吉が怒る。
「たわけ！なぁしてそれを先に言わん」
大村は呆れながらも伝令の報告を反復した。
「全軍の布陣が完了した、いう報告でしたわ。後は、城の麓の様子のことです。城の前の道に綱が張っとったり、逆茂木（木を倒して並べたもの）が立てられたりしとるそうです。土を盛って作ったちっちゃい出城もいくつかあるとか」

秀吉が舌打ちした。
「厄介やな。…まあええ。とりあえずは城のある丘のすぐ麓まで行かなあかん。それまでは力押しや。そこは変わらん」
そう言って秀吉は立ち上がると、本陣の陣屋を出た。待機していた伝令の兵に命令を下す。
「戦を始める。第一陣におる全部隊を前進させろ」
陣太鼓と法螺貝の音が鳴り響く。沓（くつ）を切り落とし、草鞋を履き替え、戦闘準備の整った羽柴軍のうち、第一陣の部隊、蜂須賀小六とその息子の家政、そして堀秀政（ほりひでまさ）の傘下の部隊、合計１５００人が城に向かって進み始めた。足軽兵たちは盆地にある水田に足を踏み入れ、稲を踏み倒しながら進軍する。
あぜ道を行く鉄砲隊は一番先頭となって障害物をくぐり、後続の槍兵が逆茂木をどかし、道に張られた綱を切りながら慎重に進んでいく。その後に騎馬隊が続いた。
ついに丘陵の麓の、城門のおよそ１２０メートル手前まで近づいた。
その時である。

ギギギギ…という大きな軋む音と共に、ゆっくりと城門が開いた。第一陣の部隊の足が一斉に止まる。沈黙が流れる。
攻め手の兵たちは硬直したままだ。それは何かが起こるまで決して解けない緊張だった。やがて沈黙の中から、かすかに金属音とドドドドという音が聞こえてきた。それは城門の奥から発しているようだった。その音はみるみる大きくなっていく。
蜂須賀隊のある兵が、「…来るぞ…」と呟いた。

天を揺るがすような雄叫びと足音と共に、約８０名の城方の武者が城門から溢れ出した。彼らはなんと、防具は古い草摺（くさずり：鎧の腰回りの部分）しかつけていなかった。上半身は裸である。よく日焼けした、筋肉質の上半身。全員火縄銃を持って、羽柴軍に向かって駆けていく。
「鉄砲隊！構え！」
蜂須賀隊、堀隊それぞれの鉄砲隊を指揮する武者たちが叫ぶ。本来の彼らならば、裸に近い侍が何十人か出てきて向かってくれれば、盛大に笑い飛ばしたのちに至近距離で射撃させ、確実に仕留めるところなのだが、今回の城方の武者たちには、そういった余裕を全く感じさせない圧倒的な気迫があった。結果、普段よりも明らかに早いタイミングで、彼ら

は鉄砲隊に射撃を命じてしまう。

「放て！」

轟音と共に、何百丁もの火縄銃から弾が一斉に放たれる。やがて轟音は止んだが、硝煙で前が見えない。硝煙も晴れた頃に鉄砲隊が見たのは、何事もなかったかのように自分たちへ襲い掛からんとする武者たちの駆ける姿だった。彼らはおそらく、火縄銃の最大射程距離、およそ１００メートルの圏外ギリギリのところで止まったのだ。そしてそれを可能にしたのは、彼らの気迫に押され、射撃のタイミングを早めた鉄砲隊の指揮官たちであった。

今度は城方の反撃の番だった。８０人の武者たちの構えた鉄砲は、お返しと言わんばかりに敵の鉄砲隊へ火を吹いた。弾籠めを急ぐ鉄砲隊の兵たちは、あっけなく血を吹き出して倒れていった。

城方の武者たちは火縄銃を投げ捨てると、走りながら腰の鞘から太刀を引き抜いた。そのまま蜂須賀隊と堀隊に突っ込む。大混乱に陥る最前列の兵たち。逆茂木などの障害物と水田によって隊列を気付かぬうちに乱されていた蜂須賀隊と堀隊の足軽たちは、数で圧倒的に劣る城方に最前列から刈り倒されていく。水田にいた一部の兵は混乱の中で倒れて溺死者が相次ぎ、ある者はぬかるみに足を取られたまま城方の武者たちに斬られて死んだ。すっかり伸び切った隊列の中を、城方の武者たちは進んでいく。

だが、その進撃を、後方にいた騎馬隊が止めた。城方の武者たちに劣らぬ勢いで、味方も敵も蹴散らしながら突き進んでゆく。

「よし、退け！」

だが騎馬隊が参戦した途端、城方はすぐに退却を始めてしまった。圧倒的に身軽なせいか、逃げ足が速い。驚くべき速さで城門に駆け込み、城門はまた閉ざされてしまった。

それと時を同じくして、本陣から城門前の戦いの一部始終を眺めていた秀吉は怒り狂っていた。

「あの頭からっぽの役立たずどもが！たかだか何十人の汚い侍にええようにやられおってクソたわけ！後であそこにおった鉄砲隊の指揮官はみーんな首刎ねたる！」と床几を蹴り倒しながら言う。

だが秀吉は同時に考える。彼が考えたのはこうだ。今の戦闘、こちらのやられ方が派手なだけで、実際の死者は皆が思うよりずっと少ないはず。手ひどくやられたように見えるのは隊列が乱れてしまったからだ。今のは物理的なダメージというより、精神的な焦りを植え付けることを狙ったものと言えるだろう。となると、間違いなく敵には次の手がある。

誘ってきている。

秀吉は本陣を出て、待機していた兵に命令を下した。

「第一陣の隊列を整えた後、第二陣も隊を進めるよう伝えろ」

しばらくして、第一陣の隊列が組み直され、後続の第二陣の前野長康と浅野長政の傘下の隊、１２００人と共に再び城へ向かって前進を始めた。

秀吉の予想は的中した。再び城門が開き、今度は雌の馬が１００頭弱、放たれたのだ。雌馬は第一陣、第二陣の足軽たちを軽々と蹴り飛ばしながら、騎馬隊の方へ向かっていく。

今度は騎馬と騎馬武者が大混乱に陥る番だった。騎馬は雄馬なので興奮していなき、制御不可能となった。次々と騎乗していた武者は振り落とされ、馬たちに踏み潰されていく。

さらには部隊長の集まりである騎馬武者たちが次々と戦闘不能になっていくことで、足軽や鉄砲隊も指示を与えられず混乱は深まっていくばかりだった。第一陣と第二陣、合わせて２７００人が、城門の手前で醜態を晒すこととなった。退却にはしばらくの時間を要した。

その夜、秀吉は本陣で諸将を集め軍議を行った。部下たちが失態を犯した、蜂須賀小六と家政の親子、堀秀政、前野長康、浅野長政らは額を床にこすりつけて秀吉に許しを請うた。秀吉は彼らを許した。紛れもなく淡河城主、淡河定範が戦上手と分かったからだ。これは並の相手ではない。

秀吉は明日、全軍の８４００人で一気に総攻撃をかけることを決定した。

「三木城みたいに長引かせるわけにはいかん。明日で決着をつけたる」

そしてその翌日、羽柴軍は陣形を展開し、全軍で城に向かって前進を開始した。全軍で打って出ただけあって、羽柴軍の行進の足音は、昨日とは比べ物にならないほどの威容を誇った。

しかしそれに比べて、城方はやけに静かだった。というよりも兵が出す緊張感みたいなものが、全く城から感じられなかったのだ。昨日あった、何を考えているのか分からないものの醸し出す独特の緊張感だ。それがなかった。城門の前に辿り着いても、何の反応もない。羽柴軍はそのまま、何の抵抗を受けることなく城門を打ち破り、城内に入って上を目指した。

秀吉は、これも何かの策なのか？と思った。そうだ。何かの策に違いない。それだけは分かる、しかし何が策なのか一切分からない。

しかし、「何か策がある」という秀吉の予測すらも、淡河定範は裏切った。何もなかったのだ。淡河定範は初日に羽柴軍を翻弄したのち、翌日に秀吉が全軍での総攻撃を仕掛けることも読んでいた。そして、ここで戦って死んでも仕方ないと、兵たちと裏手から脱出したのだった。城は朝にはもぬけの殻だった。

秀吉が激昂したのは言うまでもない。城は落ちた上、補給路も潰した。作戦上は成功だが、戦では完全に敵にいいようにされた上、勝ち逃げされてしまったのだ。彼ほどの人間が、敵将にここまで翻弄されるのは初めてだった。怒りの収まらぬ秀吉は、淡河家の領地にある陣屋や出城を全て焼き尽くした。

そしてその後、秀吉は三木城攻めに戻ることを決めた。

第5章

「その後、秀吉様は三木城攻めの本陣の平井山に戻りはった。おそらく、淡河定範が城を捨ててまで向かう先は、三木城しかないと確信してはったんでしょう。三木城の別所長治に加勢するつもりやと。

それで、平井山へ帰った後、また作戦を切り替えはったんやと思います。支城や補給路を潰してから叩くんやなくて、三木城を完全に包囲した上で、城の周辺で凄まじい捜査と検問をやって、糧秣を城に運ぼうとする奴らをひたすら殺すという手に出はった。

三木城だけを極限まで飢えさせて、そのまま干殺しにする、兵糧攻めというやつですな。そんで秀吉様は、そっから城には指一本触れんと、半年後に三木城を衰弱死させてもうた。結果的には、支城を全部潰して回ったり、補給路を全部潰して回ったりするよりは早よ済んだと思います。

でも兵糧攻めを使ったんはきっと、淡河定範を自分の立てた策の中で殺したい、いう気持ちと、でも戦を仕掛けるとまた弄ばれるんちゃうかいう怖さが両方あったから、ああいう手に出たんや思います。

でも、淡河定範本人を干殺しにすることは出来へんかったみたいで。城全体が食糧不足で弱り始めた頃、淡河定範らしき将が城の外へ出て、三木城の近くの出城で戦って戦死を遂げはったそうです。どうやって城の包囲網から出たんかは分かりません。ただそういう話を、三木城が落ちた後に敵の生き残りから聞いただけです。あの時も秀吉様は荒れてはりましたな。よほど悔しかったんやろう。自分の敷いた包囲網をまた破ったわけやし、その状態であの世まで勝ち逃げされたらもう何もできへんさかい。それでようやく、自分の中では完全な負けを認めはったんちゃうかと思います。

それこそ秀吉様が北条を潰してついに天下人にならはった時、秀吉様に京の聚楽第（じゅらくてい）に呼ばれて、自分の伝記を書くように命じられたんですけど…そこまでは普通

やったんです。やけど…その後、急に秀吉様が人払いをしはった。侍従やらなんやら全員出ていかしはったんです。何を言われんのやろうと少しびびっとったんですが…秀吉様が上座を降りて、私のところに来てこう言いはった。

“坊主、俺の伝記を書く時は、淡河の城は、俺じゃなく秀長が攻めたいうことにしとけ、死人に口なしや”と。

そう言いはったんがええ証拠…まあそういう噺です」と大村は締め括った。

大村が大きく息を吐いた。

客人が満足げな笑みを浮かべて言う。

「いや、さすが太閤殿下の御伽衆を務められた方だ。とても面白い噺だった。まさか、そんな敗け戦があったとは知りませんでしたから」

「そう言っていただけるとは光栄ですわ。あ、そういえば…」

「何か？」

「こういうことが最近あったらしいんですわ。今思い出したんですけんど」

「ほう、なんでしょう？」と客人が身を乗り出す。

「つい先日、太閤殿下の飼うとった虎が、死んでもうたんです」

客人は少し驚いた顔をした。

「それはまだ聞いておりませんでした。虎を飼っているというのは聞いたことがありましたが」

「あの虎は…去年か。黒田官兵衛殿のせがれの長政殿が、高麗から連れて帰ってきたもんやったんですわ。太閤殿下への土産物や言うて。それは殿下は喜びはったみたいで…城の一画に新しく屋敷を建てて、そん中に檻を入れてそこで飼うとった。まあ高麗攻めたんはええけど痛み分けで終わってもうたから、なんでもええから高麗からぶん取った何かしらを、ご自分の手中に置いときたかったんやろなぁ。ましてや高麗名物の獰猛な虎やさかい。檻の外から眺めて、悦に浸ってはったんちゃうかと思います。高麗全土が、この虎みたいに手に入ったらええなあ言うて。あんまええ趣味ちゃいますな。

まあほんで、その虎を殿下は可愛がっとった。やけど大変なんは餌や。毎日たらふく肉を食わさなあかん。そこで殿下は“周りの街や村で飼われとる犬を全部集めてこい”と言いはった。それでここら一帯の犬は残らず引っ張っていかれて、毎日何匹かずつが檻に入れられて、生きたまんま虎に食われとったんですわ。酷いことやで。」

「それはまた、むごいですな」と客人が言う。

「ほんまに…せやけど犬の中に一匹、勇ましいヤツがおった。手足のえらく太い、前進真っ

黒な犬やったそうな。そいつは檻に入れられた後も、虎に向かってうなって、威圧しよったんです。いっつもすぐ獲物に飛びついとった虎も、そいつを睨むことしかできへんかった。でも食いたいから、しばらくして飛びかかりますわな。ほんだら何とその犬は、逆に虎の喉笛に噛みついてもうた！虎は引き剥がそうと爪で犬の体を引っ掻きよるけど、絶対に犬は離さんかった。そうやってどっちも血みどろになりながら何刻ももがき合ったあと、ついに虎と犬は、同じ時に息絶えた…」

「そのようなことが…これまた興味深い。何やらさっきの話と似ておりますな」

「それで思い出したんですわ。人の世界も獣の世界も、まかり通る道理は同じ、いうことですな。あんまり好き放題して、何も考えんと飛びかかったらえらい目に遭うと」

「全くもって、その通り。私も経験がある」客人が同意する。大村は意味ありげに笑った。

「“甲斐の虎”と一戦交えた時でっしゃろ？」

「ええ、そうです。あの敗け戦以降は何でも家中の者が呆れるほど、慎重に事を進めるようになりました」と客人は頭をかいた。大村が「いやいや」と首を振る。

「それ以降は戦で敗けなしなんやから大したもんです。秀吉様を戦で負かしおったんは、淡河定範とあなただけなんやし」

「そういうこともありましたな。そういえば太閤殿下は、伝記に小牧・長久手の戦のことは書くなとあなたにおっしゃらなかったので？」

「あの戦は隠せるもんやありません、みんな知っとることですから」

「確かにそうですな」そう言って客人は微笑んだ。

「でもあなたと秀吉様が違うんは、敗け戦を経験して、変わったか変わらへんかったかや。どんなに力が強くて頭が働いても、ずっと変わらんまんまやったらいつかどん詰まりが来る。秀吉様も…また高麗を攻めるて言い出しはったし…そろそろどん詰まりが来とる。御嫡男がまだ2歳では、終わりが見えたようなもんや。

私は秀吉様より先に逝ってまうやろから、その後のことは分かれへんけど…そうなったら次の天下は…あなた様が取りはると見てます。その時私は浄土におるか地獄におるか分かれへんけど…その暁には、あなた様の伝記でも書きましょ」

「それはありがたい。さぞ、英雄のように描いて頂けるんでしょうな」

「もちろん。三方原の敗け戦のことも書きますけんど」

大村がおどけて見せる。

「構いませんとも。あの戦も到底、隠せるものじゃありませんからな」と、その客人、徳川家康は笑った。

（完）